

# 大正期社会主義思想における

## 「階級」とナシヨナリズムの問題

——堺利彦と雑誌『新社会』を中心に——

錢 昕 怡

序章 大正期社会主義という問題状況

第一節 問題の所在

第二節 堺利彦と雑誌『新社会』

第一章 国家戦と階級戦——第一次世界大戦にあたって

第一節 国際闘争（国家間闘争）か階級闘争か——国家観をめぐる堺と愛山の相克

第二節 「爱国心」——欧州社会党の「変節」問題をめぐって

第二章 「階級」という視座の陥穽

第一節 辛亥革命論

第二節 「日本の『日米問題』」

第三節 堺と「大正デモクラシー」

終りに——階級とナシヨナリズムのあいだ

## 序 章 大正期社会主義という問題状況

### 第一節 問題の所在

すでに多くの研究者によって指摘されているように、近代日本の知識人における戦争観やアジア諸民族にたいする認識は、その思想的営為における大きな陥穽を秘めていたといえるであろう。その意味でも、日露戦争期に、『萬朝報』や『平民新聞』などを中心に、反帝国主義・平和主義的な非戦活動を積極的に展開し、非戦論を基軸にその思想的基盤を固めていた明治社会主義者の一群は、日本近代史において特筆に値する存在である。幸徳秋水をはじめ、明治末期の社会主義者の対外認識や非戦論に関する考察は少なくないが、「所謂愛国心を経となし、所謂軍国主義を緯となす帝国主義」（幸徳秋水『二十世紀之怪物帝国主義』、一九〇一年四月）に対する批判の思想はその後の歴史においてどのように展開され、挫折を経験したのか、その研究はまだ十分になされていない。

周知のように、日露戦争の勝利によって、日本は帝国主義的国际秩序の一翼に参入し、大正期において日本帝国主义はその磐石の基礎を固めつつあった。韓国併合（一九一〇年）、関税自主権の確立、不平等条約改正の達成（一九一一年）、そして第一次世界大戦において対独宣戦（一九一四年）をおこない、大戦後に成立した国際連盟では常任理事国の地位を獲得するにいたった。この流れと同時に、欧米では「黄禍論」といった人種差別を背景にした日本脅威論と日本人移民の排斥運動が厳しさをましており、アジアでは被抑圧民族の民族主義が覚醒し、反帝国主義の三一運動や五四運動を契機に、幾多の民族解放運動・国民革命の潮流が形成されていった。このような情勢のなかで、社

会主義者たちは帝国主義化する日本の現実及び隣国の民族解放運動の動きをどうとらえていたのであろうか。

戦前日本の中国認識への反省にたち、戦後、特に一九七〇年代以来、幸徳秋水をはじめとする初期社会主義者の中国認識に関する研究がすでに数多くおこなわれている。<sup>(1)</sup> それらの研究において、日本の社会主義者の対外認識が内包する問題点として、ほぼ一致した指摘が見られる。要するに、日本の社会主義者には、当初からアジア諸国のナショナリズムにたいする問題意識がきわめて希薄であった。つまり、国家や人種、民族を横断する「階級」という視点が優位を占めるゆえに、中国そのものの現実認識に基いた中国論が形成されないで、一つのケース・スタディーとして、民族主義的観点よりも階級的視点が優先する中国革命の分析がおこなわれ、中国認識が把持せられた。<sup>(2)</sup>

しかし、このような判断に一つの疑問を禁じえない。つまり、国家や人種、民族を横断する「階級」という視点はたしてありうるのか。マルクス主義の階級概念は生産手段にたいする所有・非所有関係によって構成されている。マルクス主義の階級論にとって、近代社会の歴史は資本家またはブルジョアジーと自分の労働力以外に何物も所有しない労働者またはプロレタリアートの二大階級による闘争の歴史にはかならない。国家は本質的に階級抑圧ないし支配の機関である。そして、プロレタリアートが最終的に勝利して、階級社会（国家）がなくなり、無階級社会がそれにとって代ることが社会主義の理想である。こういう意味で、社会主義はインターナショナルでなければならない。しかし、現実の社会運動の段階では、階級闘争は民族や国家という枠内で行なわれるのであり、後者の枠組みが階級闘争の射程・様態・結末を方向づけるのである。当時の歴史状況において、日本の社会主義者がもつ「階級」という視座がナショナリズムといたいという内面的構造にあったのだろうか。

上述の問題関心から、本論では、近代産業が開花し、階級闘争に根ざした労働運動が台頭し、階級の問題がメディアにさかんにとりあげられるようになった大正期に焦点をあて、「階級」という視座を有する日本の社会主義者がナショナリズムの問題に対して、どのような思想的営為をおこなったのかという点を考察したい。

「日本社会主義運動の発生に二つの系統があった。一つは自由党の左翼、一つは基督教の進歩派であつたが、後にその二系統が合流して、明治三十四年、初めて社会民主党を組織した<sup>(3)</sup>」という堺利彦の証言があるように、自由民権思想とキリスト教という二つのルーツを持った明治社会主義の思想と運動が、一九〇五年、週刊『平民新聞』の廃刊や平民社の解散を経て、石川三四郎、木下尚江、安部磯雄らを中心とする月刊『新紀元』に結集したキリスト教社会主義（精神主義的な社会主義）派と、幸徳秋水、堺利彦など旧週刊『平民新聞』以来の多くの同志が集まる半月刊『光』のマルクス派（唯物論的な社会主義）という二つの線に分化する。両グループは一九〇六年、日刊『平民新聞』でもう一度結びつくが、その廃刊によって再び分裂、こんどはマルクス派のなかで議会政策か直接行動か――アナキズムないしアナルコ・サンジカリズムかマルクス派社会主義かといった新しい分化の要素が発生した<sup>(4)</sup>。そして、大逆事件後の「冬の時代」の到来により、国家権力の厳しい弾圧にさらされ、社会主義者の運動は完全に閉塞状態に陥ったが、第一次世界大戦を機に、資本主義の急展開と同時に、日本の労働運動や社会運動は質量ともに大きな進展をみせる。明治の社会主義は大正期に至って思想的な充実をみせるようになった<sup>(5)</sup>。第一次世界大戦当時、社会主義の大きな流れとして、『近代思想』（第一次大正元・十・三・九、第二次大正四・十・五・一）による大杉栄らのアナルコ・サンジカリズムと『新社会』による堺利彦らのマルクス主義の二つの流派がそれである。

したがって、明治期の社会主義運動との連続性をも考慮して、ここでは、あの「冬の時代」をへて、「正統派社会主義の旗印を守り抜<sup>(6)</sup>」いた堺利彦（一八七〇—一九三三）を研究対象として取りあげたい。小稿では、大逆事件後の日本社会主義運動の機関誌として位置づけられ、堺が中心になって一九一五年九月から一九二〇年一月にかけて発行された雑誌『新社会』をテキストとして、第一次世界大戦と欧州社会党の動向に関する論説を中心に、「国家」・「民族」と「階級」の問題をめぐる堺の認識、次いで、より具体的な事例研究として、辛亥革命論や在日中国人と朝鮮人労働者問題の捉え方を検討することによって、「階級」という視座に秘められた陥穽の問題を考察してみたい。まず、本論に入るまえに、ここでの研究対象となる堺の動向と雑誌『新社会』を簡単に紹介しておこう。

## 第二節 堺利彦と雑誌『新社会』

堺利彦は、『萬朝報』・『平民新聞』のころから、幸徳秋水とともに初期社会主義運動の中心的メンバーのひとりであった。明治四十一（一九〇八）年、赤旗事件に連座して入獄し、偶然にも大逆事件を免れた堺は、一九一〇年に出獄後、自宅に売文社<sup>(7)</sup>を創設し、文章代作の営業をしながら、隠忍持重しつつ時機を待つ姿勢をとっていた。

売文社は一面、浪人に衣食の途を与える組織でもあったわけで、創業当初は大杉栄、荒畑寒村、岡野辰之助などが社員に名を連ね、ややのちには高畠素之も加わっている。「社員」たちは月に一度か、二度売文社に集まって、警察官の臨検の下に茶話会などを催したりした。いわば売文社は生きのこった社会主義者たちの「小倶楽部」となり、「冬の時代」の厳寒を凌いで、細々と主義の命脈を保持しつづけた。みずから進んで機運を作るべきだと主張して、

非時事雑誌『近代思想』を大正元（一九一二年）に発刊しはじめた大杉栄、荒畑寒村とは対照的に、堺は売文社を経営しながら、時機の到来を待っていた。大正三（一九一四年）一月に、堺は「売文社の営業機関紙として、かねて文芸的娯楽物として」<sup>(8)</sup>、月刊のリーフレット『へちまの花』を発行したが、それは戯文にみちた紙面構成で、わずかに「主義者」の存在をかいまみせるものであった。<sup>(9)</sup> 第一次世界大戦がはじまって一年たった、一九一五年九月、堺は『へちまの花』を『新社会』と改題して、いよいよ「小さき旗上」を宣言した。<sup>(10)</sup>

『新社会』は薄黄色のザラ紙の菊版三十二頁、定価一部金五銭の月刊小雑誌であったが、「政治、経済、社会、文芸、科学、道徳、宗教等の事項を記す」<sup>(11)</sup>、大逆事件以降はじめてあらわれた本格的な社会主義機関誌といえる。「関を<sup>とき</sup>作つて勇ましく奮ひたつと云ふ程の旗上では勿論ないが、兎にかく是でも禿びた万年筆の先に掲げた、小さな紙旗の旗上には相違ありません」<sup>(12)</sup>と、創刊号の巻頭論文「<sup>マ</sup>小さき旗上」に表した決意通りに、『新社会』の発行を機に、堺は「持久の策を講ずる」態度と「時機を待つ」決心をひそかに堅持しながら、「大逆事件」以来の閉塞状況の突破を本格的に試みはじめた。

『新社会』の創刊号の印刷部数は千五百<sup>(13)</sup>、大正四（一九一五年）九月（第二巻第一号）『へちまの花』を第一巻としているため、『新社会』は第二巻から始まる（から大正九（一九二〇年）一月（第六巻七号）まで続いた。その後、継続誌の『新社会評論』（一九二〇年二月～七月）も発行されている。その延長線上の発展として日本社会主義同盟の機関誌になった『社会主義』（一九二〇年九月～一九二二年九月）がある。

最初は堺個人によって経営、編集責任がとられたが、大正六（一九一七年）七月には『新社会』の編集体制の整備

がおこなわれ、堺のほか、荒畑・高島・山川均・吉川守圀・山崎今朝弥・渡辺政太郎が加わって共同経営となり、編集は荒畑・山川・高島・堺の輪番制としたのである。大正七（一九一八）年、山川、荒畑の二人が出版法違反で入獄している間、主として編集に当たった高島は、急激に国家社会主義へと方向を転じていった。そこで、堺は共同経営をやめ、大正八（一九一九）年五月から自ら編集の任に当たった。したがって、堺は一貫して『新社会』編集陣の中の心的位置にあったといえる。

「冬の時代」から『新社会』誌上に「小さき旗上」があらわれるには、第一次世界大戦の影響がきわめて大きい。

荒畑寒村によって指摘されたように、対独参戦による軍需産業の隆盛と海外貿易の繁昌につれて、いわゆる成金時代が現出し、資本主義は急速に大発展をとげた。一方、英仏側はドイツの軍国主義にたいする民主主義の防衛戦をスロガンとしていたから、同盟国の日本としては、従来の社会主義思想にたいする拘束を多少とも緩和せざるをえない。そこへ、産業化の進展の結果としてあちこちで労働争議が発生し、明治三十年代の労働組合期成会に次ぐ活発な組合運動がおこり、普通選挙の獲得運動が旺盛をきわめ、論壇には民主主義の議論が活発に展開されるにいたった。<sup>(14)</sup>

応援する者があるならば、「戦術の相違、軍略の差異、それらは今深く争ひだてをする必要はない。只大同に従て相共に謀れば善い」という大同団結の考え方のもとに、『新社会』は多様な社会主義思想を内包していた。<sup>(15)</sup>『新社会』の

誌面には内外時評や社会主義学説・理論の紹介だけではなく、欧米社会主義の動向、片山潜や石川三四郎など海外在住の同志から寄せられた通信も載せており、大正期社会主義の見取図をうかがう手がかりになっている。そして、第一次世界大戦の進展につれて、さまざまな新しい思想も紹介し、「国家と階級」、「社会と個人」や民本主義といった

思想上の問題から普選運動や労働運動の政策論まで、多彩な論者による活発な議論が見られる。このように社会主義陣営の思想動向を考察するには、『新社会』は第一級の資料といふべきであろう。

国の内外において、国家主義と民主主義の衝突が顕著になるなか、非戦論という明治期社会主義の伝統を汲む大正期の社会主義者たちが、ナショナリズムの問題をどうとらえたのか。この問題の考察として、本稿では、先行研究に指摘されたアジア認識における近代日本の社会主義思想の問題点を踏まえながら、第一次世界大戦や中国の辛亥革命・五四運動といった事件に対する堺の認識を具体的に検討してみたい。

## 第一章 国家戦と階級戦——第一次世界大戦にあたって

### 第一節 国際闘争（国家間闘争）か階級闘争か——国家観をめぐる堺と愛山の相克

「吾人社会主義が非戦論を唱ふるや、その救治の方法目的如此く茫漠たる者に非ず、吾人が此点に於て一貫の論理を有し、実際の企画を有す、吾人の所見に依れば今の国際戦争はトルストイ翁の言へるが如く、単に人々が耶蘇の教義を忘却せるが為にあらざして、実に列国経済的競争の激甚なるに在り、而して列国経済的競争の激甚なるは、現時の社会組織が資本家制度を以て其基礎となすに在り、この故に将来国際間の戦争を滅絶して其惨害を避けん<sup>(16)</sup>と欲せば、現時の資本家制度を転覆して社会主義的制度を以て代へざるべからず、社会主義的制度一たび確立して、万民平等に其生を遂ぐるに至らば、かれ等は何を苦しんで悲惨なる戦争を催起するの要あらんや」。

日露戦争期に、戦争の原因は個人の墮落、宗教感の喪失にあるため、人を悔い改めて神意に従わせるべきだとした

トルストイの非戦論を批判する幸徳秋水の上記の発言は、唯物論的社會主義者の戦争認識を端的に言いあらわしているといえる。戦争の原因は資本主義諸国間の経済的競争にあり、戦争を根絶するには、資本家制度を転覆して社會主義的制度の実現を待たなければならないという主張があつたが、第一次世界大戦にたいする堺の認識は基本的にそれと同じ見解を継承している。一九一六年四月号の『中央公論』に發表された大山郁夫の「政治を支配する精神力」という一文にあらわれた「帝國主義に道德的色彩を施した理想論」を批判して、堺は第一次世界大戦の性質を次のように論じている。「僕等の見た所を以てすれば、今日の戦争は國家的資本主義の当然の結果であつて、而も其國家的資本主義が世界的資本主義に変転せんとする、進化過程の一段階である。そして将来其の世界的資本主義と世界的労働運動との闘争の結果、労働が遂に資本を征服して前古未曾有の新社會を現出するのである」<sup>(17)</sup>。

堺の見取図からいえば、各国間の資本家階級の矛盾の激化と利益争奪戦である世界大戦はくりかえしおこるが、そのたびに、資本制度の世界化が進むと同時に、労働階級の世界化も拡大し、世界大戦はくりかえし生ずるなかで、最終的には国家組織という枠組みを超越した、世界的規模の資本家階級と労働者階級の二大階級の戦いとなり、最終的勝利は世界のプロレタリアートに帰着する<sup>(18)</sup>。

山川均などにも共有された、横の国際闘争を否定し、縦の階級闘争を中心とするこのような世界大戦認識に批判を加えたのは山路愛山である。人間がもつ「相殺す」という獸性に適合する「戦争は人の常態にして変態にあらず」と<sup>(19)</sup>という戦争観を持つ愛山によると、こんどの世界大戦は新興国のドイツが旧国のイギリスが不能力ながら、「現状維持という惰性」のみによつて、広漠な植民地と多大な利権を支配している「世界の厭ふべき現状を打破し世界の不公平

なる地図を整頓する」<sup>(20)</sup>ために勃発した。そして、戦争の勝敗は「国力の結果」であり、「国民の運命は唯須らく国民自身の量と質とに求むべ」<sup>(21)</sup>きである。ドイツに対する宣戦の詔勅がすでにくだった以上、この激しい生存競争を勝ち抜くため、挙国一致を実現し、「日本帝国民」の国家に対する献身的奉仕が不可欠である。しかし、国家は資本家階級の掠奪機関にすぎないという堺らの非戦論者の論理は「必ず国民をして弱兵たらしむべきものなり」<sup>(22)</sup>と愛山は憂慮していた。山路愛山は自らの編集責任で発行している雑誌『独立評論』に、自由討論の必要を主張する一方、堺らは「余り階級の生存競争に執着し、国と国、人種と人種の生存競争を閉却す」<sup>(23)</sup>と難じている。愛山の非難に対して、堺は、「反対に愛山君は全く階級と階級の生存競争を閉却してゐる」<sup>(24)</sup>として、第一次世界大戦にあたって国際闘争か階級闘争かの問題をめぐって愛山と論戦を交している。

山路の論点は主に次の三点である。①「人類の歴史は一国民若くは人種が一個の集合体として諸国民若くは諸人種との絶へざる生存競争の記事た」り。②「社会主義者は単に眼界を一国内、若くは一人種内の生存競争に限れることに於て見遁し難き短所を有」す。③「国民は生存競争の一機関として発達したる一個の単位なり。一個の形式なり。国民は歴史的進歩の産物なり。国家は強者が自己の利益の為に弱者を虐ぐる機関に非ず、他の国家の攻撃と圧迫とに對し共同生活を維持せんとする機関なり」<sup>(25)</sup>。愛山への回答として、一九一六年六月の『新社会』（第二卷第十一号）に、堺は「国家戦と階級戦」と題する論文を発表している。

堺はまず、いまの政治批評家、社会批評家を次の三種類に大別している。すなわち、「a、人類の生活を縦断して考へる者。即ち国家と国家との関係を根本視する者。国家主義者、帝国主義者の類。b、人類の生活を横断して考へ

る者。即ち階級と階級との関係を根本視する者。社会主義者の類。c、右両者を折衷する者。国家社会主義者。社会政策論者の類。「山路君はcに属する如く、またaに属するが如き人である」<sup>(26)</sup>という。そして、上述の「階級と階級との関係を根本視する」社会主義者の立場から愛山の三つの論点を逐一検証している。

かれ曰く、愛山の論点①は原始社会だけにあてはまる。マルクス、エンゲルスが『共産党宣言』のはじめに書いたように、原始氏族制社会が消滅し、私有財産制度が生まれ、国家の発生後は、「一切社会の歴史は階級闘争の歴史である」。他国民他種族との闘争もあるが、「然しそれも自国内の人民を統治するの新権利（及び其利益）を獲得しようとする闘争である」。甲大名に属するか、乙大名に属するか、農民からみれば何の違うところもない。他国と競争する場合、たしかに山路の論点③のように、「共同生活を維持する」ため、国内の闘争が緩和されて、治者が仁政を施行し、人民は愛国心を発露する。しかし、「此の仁政は時として甚だしく政略的であり、従ってそれに対する愛国心は時として甚だしき迷想的である」。上下一致団結しているように見えても、「階級闘争の事実、治者被治者の関係を抹殺する事は出来」ない。そして、今の労働者の国際的団結運動を見れば、山路の論点②も事実に合わない。「山路君自身こそ、単に眼界を国際間の闘争のみに限り、国内の階級闘争及び階級闘争と国際闘争との関係を無視した点に於いて、実に『見遁し難き短所を有す』<sup>(27)</sup>」と、堺は批判している。

上述した論点から、堺と愛山の立場の違いは主にそれぞれの国家観に由来していることがわかる。「国家は強者が自己の利益の為に弱者を虐ぐる機関に非ず、他の国家の攻撃と圧迫とに対し共同生活を維持せんとする機関なり」という文章にあらわれたように、愛山にとって、「国家」というのは「共同生活」を維持する機関である。この見方と

堺の国家を支配者階級が被支配者階級を圧迫する機関とする階級闘争史観との対立は実は日露戦争の時代にさかのぼる。

堺と愛山は一八九七年、毛利家編輯所で知りあって以来個人的に親しく、「その説のゆえをもってその友情を捨てず」<sup>(28)</sup>、晩年にいたるまで、互いにしばしば往来していた。<sup>(29)</sup>一九〇三年、堺らが平民社を設立し、『平民新聞』を創刊した年に、愛山は個人雑誌『独立評論』を刊行した。日露開戦寸前となり、対露強硬論が熱狂的に盛り上がるなか、平民社は「非戦論」を全面に打ち出したが、それにたいして、愛山は「非非戦論」をもって応じたのである。愛山によれば、国際社会に「ダルウィニズム」が蔓延している今日において、「国家の武装を壮んにし、他国の権利に向つて侵害を加へんとするもの」に「言論以上の制裁を与ふる」ことは、実に「已むべからざる」ものといふべきである。<sup>(30)</sup>愛山のこのような主戦論は、現実の日本とロシアの対抗関係が直接的なきっかけとなっているが、その背後には、世界全体が「国民的運動」(国民国家の確立)の時代から帝国主義の時代に突入したという認識があった。<sup>(31)</sup>列強諸国は新たな時代の趨勢にそくして、それぞれ領土の拡大に狂奔している以上、日本においても、こうした列強への対抗措置として、「帝国主義」的政策を推進すべきである。なぜかといえば、「人間は存在の権利」があるからであると愛山は言明している。<sup>(32)</sup>

「余は嘗て国家の存在が今日ほど大いなる問題とならざりし昔日に於て、先輩に従がつて個人の自由のために論戦の一兵卒たりき。今や世界の運命は急転直下して国家の存在は昔より切要なる問題となれり。余たるもの何ぞ時勢の変化と共に其論歩を一転せざることを得んや」<sup>(33)</sup>。ここに見られるように、愛山にとって、国家の存在は個人の自由を

確保する先決条件になっている。民友社の一員として、平民主義を説いた愛山における帝国主義への思想的転回には、かれの国家観が大きな決め手となっていると思われる。

自らの「帝国主義」の主張を具体化するものとして、一九〇五年二月から翌年の四月にいたるまで、愛山は『独立評論』に、「国家社会主義」をめぐる論説を数次にわたって掲載した。この諸論稿はのちに『社会主義管見』（金尾文淵堂、一九〇六年）と題して一冊にまとめられた。ここでは、この『社会主義管見』の内容に即して、かれの国家観念を簡単に紹介しておこう。<sup>(34)</sup>

愛山によれば、「日本歴史は国家（主権及び其代表者たる国家機関の全体を指す）と豪族と人民との三階級が国内外の情況に依りて或は争闘し、或は調和し、依つて以て共同生活の理想を実現せんとしつゝ、ある動作の連続に外なら<sup>(35)</sup>」ない。このような日本歴史のユニークな理解から、かれは「日本国民の総体は一家族なり」と宣言し、人民は兄弟で、皇室は人民の父母で、「共同生活は日本王道の根本義」であると述べている。<sup>(36)</sup> この日本歴史の上に定位された家族国家像をかれはそのまま普遍的國家観に投影して、「国家」というものは元来、「共同生活を目的として起こりしものなり」と定義している。そして、この「共同生活」とは対内的と対外的という二つの面において意味がある。

一つは、「経済的の意義に於てするものにして、樹液の全樹を循環するが如く一国の富の人民各個を潤す為めに有機的に活動する」ことを目的とする。そして他の一つは「防衛的のものにして他国の略奪より人民の生命財産を保護する」ことを目的とする。ところで、共同生活の目的を達するために、国家は個人の権利を妨害する可能性について、家族共同体に対する信頼を理由に、愛山はこれを政策の問題として斥け、「法律に於ては国家の権利は絶対なり」と

述べている。<sup>(37)</sup>

愛山の以上のような国家観にたいして、批判を加えたのはほかでもない堺であった。一九〇五年二月二〇日号の週刊『光』に『『国家社会主義梗概』を読む』と題して発表された一文に、堺は先ず、愛山のいう「国家」が、場合によっては、「日本国民の総体」を指し、あるいは「政府」を指したり、「天皇」を意味したりして、意義「明瞭ならず」と論駁した。<sup>(38)</sup>これにたいして、愛山は『独立評論』の一九〇六年二月号及び七月号に「堺枯川君に答ふ」という文章を書いて、次のように答えている。

「万物は一物のために存し、一物は万物のために存す。君主は本幹なり、政府は枝葉なり、国家は全軀なり」。「本幹を離れて枝葉なく、幹、枝を離れて全軀な」いように、「君主も、政府も、国家も、人民も均しく国家なり」。<sup>(39)</sup>

堺が、「君主」、「政府」、「人民」をそれぞれ別個のものとしてとらえていたのに対して、愛山は「共同生活の目的」を実現するためにこの三者が互いに不可欠な関係にあるとみなしていた。階級闘争史観から、堺は愛山の「国家」概念が、階級的支配関係を隠蔽するイデオロギー性を敏感に感じとったのであろう。しかし、前述したように、愛山は歴史を構成するものとして、国家、豪族、人民の三つをあげている。かれはそれを三元論と呼び、「国家は必ずしも紳士閥の奴隷に非ずと信ずるが故に、平民級の輿論を以て国家と相呼応し紳士閥の専横を抑へ依つて以て共同生活の目的を達せんとするものなり」と述べ、国家は「その健全なる時に於ては」常に人民を保護するという見方から、マルクス主義の階級闘争説を二元論（紳士閥と平民級）と批判した。<sup>(40)</sup>

堺が現実の政治関係を念頭において問題を提出したのにたいして、愛山はあくまでも理念上の、あるいは当為とし

ての国家像を説きつづけたといえる。そして、日露戦争のような国家的危機の場面に直面すると、「共同生活」を防御する観点から、国内の利害対立よりも、国家全体の対外的利害を優先すべきであるという論理の展開になる。その意味で、平民主義から帝国主義への思想的転回はいずれの国家観からの当然の帰結といえよう。

富の分配の不公平という国内の現状にたいする社会主義者の分析と批判に、愛山はある程度共感をもっていた。しかし、それは共同体内部における「親族的精神」の復活や各種の社会政策の徹底によつて調和可能な矛盾であり、「国家と国家、民族と民族との争」こそ死活問題であるという判断から、愛山は非戦論を批判することになったのである。帝国主義をもつて侵略主義とし、したがつて自由主義から一変して侵略主義に転じたという非難にたいして、かれは帝国主義は正が不正を、健康が不健康を競争場裡から駆逐する、適者生存の原則の具体化であるという<sup>(41)</sup>。「人は生存せんがために生存し。生存せんがために戦ふと云ふは裸体的真理<sup>(42)</sup>」なのである。愛山にとって、戦争とは、自然界に普遍的に見られるような弱肉強食の生存競争という「裸体的真理」の発現にほかならなかった。

このような戦争観は、日本人移民排斥運動の高まりや第一次世界大戦の勃発にうながされて、ますます強固なものとなつていった。一九一六年、愛山は、国際戦争の結果として、「世界混一」の形勢にむかうが、必ず「武力を以て世界を統一する帝国の出現<sup>(43)</sup>」をみると断言している<sup>(44)</sup>。そして、「此帝國的競争の時代に於て何ぞ独り人後に落つべけんや」といつて、日本がこの弱肉強食の国際的競争を勝ち抜いていくことを課題とする。「愛山君も矢張り大いに侵略的戦争を主張する論者である<sup>(45)</sup>」と堺は容赦なく批判している。

前述した「国家戦と階級戦」の論争にもあらわれたように、国家という共同体の内部にある階級的征服の事実を看

過するため、国際戦争を共同生活体相互の征服闘争としている愛山にたいして、堺は唯物史観の立場から、いわゆる共同生活体内部における階級的闘争、治者と被治者の闘争を重要視する。そもそもいったん、共同生活体内部が階級的に分裂してのち、厳密な意味での共同生活体はもはや存在しない。そのため、「横の闘争」のように見える国際戦争も共同生活体の名によって行われたとはいえ、実は征服階級と被征服階級との闘争であり、治者と被治者との間の征服であった。「資本の国際主義は今度の戦争を期に更に一歩進めている。次の世界大戦は国際的資本対国際的労働の戦争になるかどうかは問題<sup>(46)</sup>」といった戦時中の発言にも見られるように、堺は国際戦争を機に、階級闘争がさらに激成して、国際的階級戦争に発展していくことに関心をよせている。

大逆事件ののち、社会主義者がその活動の場をほとんど奪われた時、愛山は堺に『国民雑誌』『独立雑誌』の紙面を提供して文章を書かせた。愛山の国家社会主義の構想への反論という形を取り、堺は「公然」と史的唯物論を発表してきたといえる。<sup>(47)</sup> 明治期の論戦以来、両者の立場は基本的に変わっていないと思われるが、「人類最初の世界大戦」という緊迫した現実が突きつけられた時、理想的な国家観を持つ愛山の国家間闘争観のほうが、当時、現実の資本主義制度に対する分析にもとづく階級闘争観より、リアリティと説得力をもっていたのはなかなか興味深い。

「山路君は或は云ふかも知れぬ。現在の欧洲戦争は国家と国家との生存競争である。然るに平生から階級闘争を根本視して居た社会党が、各自国の政府を助けて戦争して居るのは矛盾ではないか<sup>(48)</sup>」。現に開戦前まで、開戦に強く反対していたヨーロッパ各国の社会党員が、戦争が始まると態度を一変して戦争に協力するようになった。国家より階級を重視する堺は、実際の戦争という非常状態において「愛国心」——堺はそれを「迷想」と理解していたが——を

どのようにとらえたのか。それをさぐる手がかりとして、次節においては、欧州社会党が戦時中に戦争協力に転身したことにたいする堺の認識から考察してみたい。

## 第二節 愛国心——欧州社会党の「変節」問題をめぐって

一九一四年七月二八日、オーストリアが皇太子暗殺事件のために、セルビアに宣戦布告したことを契機に第一次世界大戦がはじまった。対立の構図はドイツとロシア・フランス・イギリスとの対立軸がその中核を形成する。それまで、開戦に反対していたドイツ社会民主党は、祖国を守るために、政府提出の戦時予算案にカール・リープクネヒトを除きすべての議員が賛成した。フランスではドイツの軍国主義を打倒するために社会党議員がこぞって戦争協力に走り、戦時内閣に入閣するほどであった。イギリスでも当初、労働党は平和維持を要望する決議文を下院で読みあげる予定であったが、対独宣戦布告が発表されるや、委員長のマクドナルドやケア・ハーデイら数名をのぞいて反対者が続出し、結局、決議文は取り下げになった。<sup>(49)</sup>

こうした欧州社会党の「変節」問題は、日本の社会主義者にとっても深刻な事態として受けとめなければならぬ事実であった。堺は社会主義の主張からいつて「如何にもそれは矛盾である」とその非を率直に認めたが、それはしかし「単に一時の変態に過ぎない」<sup>(50)</sup>として位置づけ、将来の欧州社会党が中心となって展開されるであろう非戦運動と平和運動に明るい希望をいだいていた。<sup>(51)</sup>

堺によれば、列国の社会党ははじめから提携して戦争を未然に防止しようと努力したが、その「団結がまだ十分鞏

固でなく、一般労働階級の自覚がまだ十分明瞭でなく、佛のジョーレスは為に暗殺の難に遇ひ、彼等は遂にその目的を達することが出来なかつた」。そして、すでに戦争が勃発した以上、「彼等（筆者注——列国の社会党）も亦或は政略的の愛国心鼓吹に動かされ、或は半ば迷信的に人種の本能を燃し、或は又絶望的に古き戦闘的本能を現はし」<sup>(52)</sup>ため、ついに今日のような「変態」を示すにいたつたという。

第一節に引用された論文「国家戦と階級戦」にも見られるように、堺は真の共同生活は利害が一致する階級内部のみに存在するため、より包括的な近代民族国家への献身を要する「愛国心」は、支配階級が対内抑圧と対外侵略をおこなうため、政略的に操縦され、動員された国民大衆の「半無意識」の「迷想」にほかならないとしている。「愛国」という名の大義名分によって継続されている戦争は、結局、「多数国民に過大の負担を甘んぜしめ、それに依つて少数上流階級が専権自恣の生活を世界に誇示するの結果になる」<sup>(53)</sup>のである。

しかし、なぜ社会党が、このような「迷想」に囚われるのか。一九一七年四月と六月号の『新社会』に、堺はブジンの「社会主義と戦争」を翻案し、前後して「欧州戦争の経済的原因」、「欧州戦争の精神的原因」という長論文を寄稿し、精神的原因が経済的原因の反映で、道德的必要（上部構造）が物質的必要（経済的基礎）から変化してきているという唯物史観から、第一次世界大戦の精神的原因に指称されている国民主義、人種主義、文化主義といった思想の由来を資本主義経済の発達史にそつて、丁寧に解説している。要するに、国民国家や人種の形成は資本主義の経済単位の変化と密接なかわりをもっていること。近世の織物製造時代では、織物を販売するという物質的必要から、自由主義が精神的必要となつて登場し、政治上において共和主義及び民主主義が叫ばれ、国際上において門戸開放の

世界主義となり、国民的文化主義は世界的人道主義となった。しかし、いまや鋼鉄産業の時代となり、鉄鋼を販売するという物質的必要から帝国主義という精神的道徳的必要に変化させられた。そこでは、世界規模の市場拡大と支配を正当化するために、民族を序列化し優劣づける人種主義、文化的国粹主義が理論的に精緻化されていく。したがって、最近二三十年のヨーロッパでは、共和主義、民主主義から離れて、専制主義、貴族主義に近づく傾向が一般の現象となり、大戦の勃発にいたった<sup>(54)</sup>。堺はいう。帝国主義の唱道家が「必ず偽善的だと云ふのではない」。個人的に見ても心理的に見ても、かれらの多くは「極めて純潔な理想家」である。大事な点は、「社会的必要が個人的道徳に變形された<sup>(55)</sup>」ということである。「社会の物質的必要が個人の心中の道徳的必要となって現れる時、個人は自己の物質的必要を犠牲にして、純乎たる精神主義の発揚に満足することになる<sup>(56)</sup>」のである。堺から見れば、帝国主義や愛国心の高揚は「物質的必要」——資本主義諸国間の産業競争の結果にはかならない。この指摘は欧州社会党の転向を「変態」とする論拠と見てもよからう。

多くの学者に指摘されたように、素朴で自発的な共同体への愛情がパトリオティズム (Patriotism) に組織されて、それが国家 (Government) にたいする忠誠観念に動員される近代的な愛国心の発展は政府、統治機構の念入りな国民統合政策に大きく依存している<sup>(57)</sup>。国家の本質を階級的搾取の機関としているため、堺は政略的に動員された愛国心の「迷想」としての一面を鋭く見抜いているが、その発生の契機を単純化している傾向がある。堺がいうように、集団の「物質的必要」のために、なぜ個人は「自己の物質的必要を犠牲にして、純乎たる精神主義の発揚に満足することになる」のか。そこには、国家権力の操縦だけではなく、もっと複雑で歴史的社会的な契機や情動的な人間心理

が存在するはずである。ところで、堺の愛国心の捉え方においては、たとえば民族問題に対する考察は十分におこなわれていない。

戦争の終盤にちかづき、講和条件として民族自決主義が掲げられ、日本国内において、室伏高信などによって、「民族的国家」の独立、自由、平等を内容とする「民族主義」が「今日の国際文明の、基底的主潮と成つて来た」という主張がさかんに唱えられるようになる。民族について、「民族精神の主体であり」、「人種や言語や宗教や権力と無関係に成立し得る」<sup>(58)</sup>という室伏の観念論的な説明がもつイデオロギー性に着目して、室伏の民族主義の主張を『新社会』では幾度も取りあげて批判を加えている。<sup>(59)</sup>堺によると、近世国家は資本主義生産の経済単位として出現し、民族主義は国家形成にあつたの「思想上の現れ」であつたが、「今日の大経済は既に超民族、超国家の大単位を必要として」いて、「民族的国家は既に過去の夢である」<sup>(60)</sup>。そして、連合国側が打ち出した「民族自定主義」は「戦勝者が自分の利害関係のある小民族（もしくは小国家）を敵国に与へまいとする」、あるいは「戦勝者が自分の勢力圏内にある小民族（もしくは小国家）をそのまま体裁よく自国の保護の下に置かうとする口実」にはかならない。そのような連合国のエゴからきた「民族自定主義」をみて、「民族的国家の主張は即ち今度の戦争の目的だ」という室伏の民族主義の主張は後向きで、非常に皮相な見方である。レーニンも立派な民族主義者であるという室伏の指摘にたいして、堺は「レーニンが他民族の労働階級と結託提携して、自国同民族の紳士閥を滅ぼそうとして」いるではないかと反駁している。

以上の議論から見られるように、堺において、民族は国家と同じく、政治権力によって作られたものであり、その

本質も階級的対立関係にある。パリ講和会議後の一九一九年十月に、唯物史観に基づいた研究成果として、堺にこれからの人類歴史の発展を展望する「恐怖・闘争・歓喜——人間と自然、国家と国家、階級と階級」という一文がある。その副題に示されているように、人類生活における闘争として、人間と自然の闘争、国際競争及び階級闘争を挙げているが、民族間の問題についてはほとんど触れていない。室伏の民族主義にたいする批判にもあらわれたように、堺の民族の問題にたいする冷やかな態度は、非政治的な「民族精神」によって、政治的な階級的対立が隠蔽されてしまうことにたいして、有力な抵抗の姿勢につながる。しかし、他方、かれの民族主義にたいするこのような否定は大国主義や侵略主義に反対し、弱小民族の独立解放を支持する、といった室伏のこの時期の「民族主義」の主張に含められている積極的な部分まで抑圧してしまう恐れはあるのではなからうか。

たとえば、階級という視座からインターナショナルをめざす堺は日本の社会主義者として、日本の侵略に抵抗して起こる三一運動・五四運動といった民族解放運動をどのようにとらえたのか。次章では、堺の中国論及び在日中国人と朝鮮人労働者問題の捉え方を中心にこの点を検討してみたい。

## 第二章「階級」という視座の陥穽

### 第一節 辛亥革命論

「社会党の運動は万国運動である、人種や国境の区別はない<sup>(61)</sup>」という方針のもとに、明治期社会主義者にあつてはアジア諸民族の留学生・革命家とのあいだにさかんな交流がおこなわれた。一九〇七年三月に、中国同盟会の張継・

劉師培・章炳麟・蘇曼殊・陶冶公・何震・陳独秀らの革命派がインド人と協議して、広くアジア被圧迫民族の連帯によって反帝国主義の民族独立をめざす亜細亜和親会を結成した。それは章炳麟会長のもとに、日本・ベトナム・ビルマ・フィリピン・朝鮮など、アジアの革命家をうって一丸とする組織であった。約一年半続いた同会の活動に、堺も大杉・山川らとともに参加していた。亜細亜和親会が発足した同年八月に、張継・劉師培・章炳麟・何震らが社会主義講習会を発起し、その講演会の講師に幸徳や堺・山川・大杉らが招かれた。講演の通訳を担当した張継が通訳に自分自身の主張を織り交ぜていたとか、のちにそのころのことを懐かしく語る文章は堺や山川に見られる。<sup>(62)</sup>幸徳秋水が主催していた「社会主義金曜講演」や「社会主義夏期講習会」にも中国人のほか金如春などの朝鮮人が参加しており、このような中国や朝鮮への社会主義理論の受容に日本の初期社会主義者が深く関わったことは広く知られている事実である。<sup>(63)</sup>

しかし、社会主義運動にたいする厳しい取締りと国内の民族独立解放運動への規制によって、日本の社会主義運動家とアジアの革命家との連携は退潮期を迎えざるをえなかった。一九〇八年一月金曜会の屋上演説事件に連座して、張継がパリに亡命、さらに一九〇八年六月の赤旗事件のために堺・山川らは入獄、中国及びインドの同志も日本政府の弾圧によぎなくされて各地に離散し、亜細亜和親会も何の効果もあげることなく解散してしまった。大逆事件以降、堺らの中国・アジアの留学生・革命家との交流はもはや活発ではなかった。ところで、第一世界大戦が勃発して社会主義勢力の陣営の再建が端緒になって、堺はときおり『新社会』の時評欄で、中国の現状にたいする論評をおこなっている。ここでは、まず『新社会』のテキストを中心に、堺の辛亥革命観を考察してみたい。<sup>(64)</sup>

一九一一年に勃発した辛亥革命について、堺がようやく口を開きはじめるのは『新社会』の第三号からである。一九一五年十一月号の「橙黄橘緑」（「社会時評」）の中で、堺は「支那革命の性質」について次のように論じている。

「支那共和国は再び帝国の形に跡戻らんとしつゝある。フランスの共和制が幾度も王政帝政に跡戻つた事を思へば何の不思議もない。

先達ての支那の革命は、百廿年前のフランスの革命、五十年前の日本の革命と同じ性質のものである。封建制度を破壊して資本家的国家を建設する、自然の運動の一種である。

思ふに支那は今後まだ幾度かの小革命、小撓乱を経て、初めて資本家制度の近代国家になるであらう。そして其後に於いて初めて真の社会主義運動、労働運動が起るであらう」。<sup>(65)</sup>

短評ではあるが、それは堺の辛亥革命観の基本的輪郭を明確にあらわしている。要するに、堺にとって、辛亥革命はフランス革命、明治維新と同じく、一種のブルジョア民主主義革命であり、封建国家から資本主義国家へと移行する中国近代化の一過程にすぎない。しかも、こんどの革命は未完成で、帝政に逆戻りする可能性を秘めており、いわば、それは資本主義を確立した近代国家を建設するプロセスに属する変革である。その意味で、社会主義運動は中国にとってまさにその後にくる課題なのである。

このような中国革命観はその後の堺の中国論に貫徹されていた。たとえば、一九一六年初、袁世凱が帝政を復辟し、中国の政局は混迷を深めるなか、堺は南方の孫文らの中華革命党をはじめとする運動に着目しながら、「袁世凱は没落を免れないだろうが、その後においてはたして革命党の理想は実現されるであらうか」と述べて、革命党の前<sup>(67)</sup>

途について悲觀的であつた。堺によれば、革命党の理想は多種多様で、明確な共通点は存在していない。たとえば、孫文は「ヘンリー・ジョージ流の土地国有主義」をいだいている。「張繼君の如きは純粹なる無政府主義者である」。日本の維新前の志士あるいは自由民権家と同じように、中国の革命党もただ「未だ明瞭にかれ等の意識に上らざる經濟的原因の為に刺激せられて、今の革命運動を起してゐるのである」。しかし、その理想は「必ずしも精密に其の經濟的原因と一致して居らぬ。従つて革命成就の暁、其の理想の實現されぬに失望する事になるに相違ない<sup>(68)</sup>」として、革命の前途多難さを予見していた。

一九一六年七月、袁の帝政がすでに破綻した平和復活期においてもその見方は変わらず、堺は『新社会』の時評「孫逸仙と板垣君」では、同じ悲觀論をくりかえした。「支那は袁世凱の死に依つて形勢の急変を見やふとして、然しながら又存外行悩みの姿である。謂ゆる革命党が何処まで果して革命的の理想を實現し得るか。思ふに今後猶幾度かの反動又反動を経過して、結局生ぬるい妥協に終るであらう。そして孫逸仙君の将来は或は日本の板垣君の如く、張繼君の将来は或は日本の中江兆民の如くなるではあるまいかと、僕は竊かに氣遣つてゐる。支那の本当の革命はそれから後の事である<sup>(69)</sup>」。

堺にとって、孫文が率いる革命党は「大体において南方紳士閥の代表者」であり、「かれ等は十四億人民<sup>(70)</sup>のために正義の戦ひをしてきたと信じてゐるのであらう。然し其の實際は、北方の武力に対する南方の財力の戦であつた」。南北対立の「煮えきらぬ状態」は当分続くだろうが、孫文一派の将来は「我の板垣伯の如くにして老いるか、或は洪沢男の如くにして富むであらう」と予言し、孫文などの革命家を終始ブルジョアジーの代表と見ていた。

上述した堺の中国革命認識の基底をなすのはマルクス主義的唯物史観の立場から発した封建主義社会↓資本主義社会↓社会主義社会という二段階革命論の図式にはかならない。ブルジョアジーの代表者としての孫文らよりも、かれは社会主義勢力の成長を期待していた。その視線の先にあるのはブルジョア民主主義革命ではなく、その後の社会主義運動による「真の革命」である。辛亥革命に対する堺の態度は確かに悲観的であった。また、日本より中国は遅れて近代化しつつあるという、日本社会主義者の先進国優越意識を批判するのにもたやすい。しかし、裏返してみれば、それは唯物史観という「科学」にもとづく中国革命への大局的把握と長期的視野が前提になっているゆえに、混沌とした中国革命情勢を分析するにあたり、堺はつねに「形勢は必ず逆転する。反動は必ず起る。そして今日無意識の中に要求されてゐる経済的の必然現象が発生する。それは外でもない、近代産業制度の確立である。換言すれば支那国の資本化である。更に之を換言すれば純粹な黄金政治の実現である。近代的の意味に於ける真の革命はそれから後の事である」<sup>(71)</sup>という展望をもつことができたのである。それは野村浩一が指摘したように、「堺によれば、中国の動向は、まさに『経済的の必然現象』に左右されているのであり、したがってその視角をわがものとすることによって、その将来を予想することが可能」なのであった。こうした把握は「社会主義が日本の中国認識に付け加えた一つの型に他ならない」<sup>(72)</sup>という評価に値するであろう。

ところで、専制政治を打倒し、アジアで最初の共和国を誕生させた辛亥革命は、帝国主義列強による分割の危機にさらされる「支那を以て支那人の支那とせんとする自主的運動の序幕」<sup>(73)</sup>であると理解していた同時期のリベラリストに比べて、堺が辛亥革命の民族主義的側面を見落としていることは否定できない。それは第一章の「国家戦と階級

戦」で述べたように、堺からみれば、「民族的国家は既に過去の夢であり、「横の闘争」よりも「縦の闘争」、国家や民族よりも階級という範疇を重要視しているからであろう。さらに、民族主義的視点よりは階級的視点にたった中国革命の分析・中国認識という批判に加えて、帝国主義化する日本における一知識人として、堺ははたして、どこまでナショナリズムから自由であったのか、という論点をあえて提起したい。第一章で取り上げたように、堺らは欧州社会党の「変節」問題を敏感に受けとめたが、日本の社会主義者として、帝国主義化する日本の現実や植民地問題をどのように批判しえたのか。

## 第二節「日本の『日米問題』」

一九一五年一二月の『新社会』で、堺は「慢心せる日本人」という一文を書いて、大戦景気で戦争熱を昂進させている日本の現実を次のように批判している。「日本は一等国になつた。世界の大戦争に対して有力なる一要素となつた。英仏の如きお歴々から頻りにチャホヤされている。青島は疾くの昔し蹴破つた。南洋の中心にも既に足場を拵へた。支那に対しては事毎に強圧を加へ得るの地位に立つて居る。露西亞には多額の軍需品を供給してやつて居る。印度南洋等に対しては頓に輸出の大増加を示して居る。日本は実にトン／＼拍子を以て全世界に覇を唱へ得るの好運に際会して居るかに見える」。そこで、「輕佻淺薄なる愛国者等」は「自惚、慢心、有頂天の極に達して居る」、軍国主義がとんでもないところにまで唱えられている。事情に通じ、大いなる危惧をいだいている少数の識者も「世間の浮調子」に押されて、「謂ゆる国家の危急を痛切に感じながら、同じく俗論に反抗するの危険を感じて、只其口をつぐ

んでゐる<sup>(74)</sup>」。

しかし、日本帝国の世界進出とほぼ同時に、黄禍論や日本人移民排斥問題は大きな問題となり、人種競争や日米開戦の可能性がさかんに唱道されている。堺は太平洋方面における日米両国の利害の衝突は免れないだろうと見て、日米開戦の可能性を認めたが、一文の最後に、「日本人の多くは、戦争をすれば必ず勝つものと信じて居る。今度の大戦争で戦争の損害と苦痛と悲惨を痛切に感じて、如何にもして之を防止せねばならぬ事を覚るべき筈であるのに、彼等は猶自惚れの夢が醒めず、却つて益々戦争熱を昂進させて居る。嗚呼憐むべき自惚の日本人よ。嗚呼恐るべき慢心の日本人よ<sup>(75)</sup>」とむすんで、帝国主義化する日本国内の風潮に嚴重な警告を発している。

アメリカ及びオーストラリアなどで顕著になってきた日本人移民排斥の動きに刺激されて、好戦的な感情が昂ぶつて、各メディアが対外政策の面から次々と「日米問題」を取りあげるなか、『新社会』は日本国内の「日米問題」に注目したのである。

一九一七年九月、高島素之は『新社会』の「火の見台」（時評）に、低廉の労働力を獲得するために、「日鮮同化」という名目で、「朝鮮人使用論」がさかんになっていることを取りあげ、「内地労働者から見れば、彼等（筆者注——「朝鮮労働者」）はまさにスカップである。賃銀引下げの道具である。生活の圧迫である」から、「茲に於いて『日鮮同化』は愚か、米国の日米問題が其の俚日本に再現するやうな結果を生ずることは見え透いてゐる<sup>(76)</sup>」という「日本の『日米問題』」を指摘した。土地狭く、人口過多という理由で、熱心に「領土拡張、海外発展を絶叫」しながら、植民地の労働者を内地で働かせる「帝国主義の先生たち」の矛盾を鋭く突き止めている。

次号の同じ時評欄に堺は高島の問題提起を受けとめ、「朝鮮労働者輸入問題」という一文を書いている。堺はこの問題を日本における「労働界の大問題」として位置づけている。「高島君が『日本の日米問題』と云つたのは実に面白い警語で、謂ゆる『同化政策』が遂に『鮮人排斥』に終わるべきは見易き道理である」と植民地同化政策の虚偽性を批判し、さらに内地労働者よりもっと低廉で柔順な労働力をえるため、「朝鮮人」ばかりではなく、「支那人労働者」もすでに大阪地方に入り込みかけているという事実を指摘し、資本家はあらゆる方策を尽くすから、「資本家の同情と温情とに信頼せよ」と労働者に説法する労使協調論者を糾弾した。<sup>(77)</sup>

『新社会』で、「日米問題」ははやくは、片山潜の海外通信によって取りあげられている。『新社会』の第二巻第四号（一九一五年一二月）に掲載された「米国の排日運動」のなかで、片山はアメリカの新聞紙は『日米開戦夢物語』といった出版物を抄訳して、排日熱を鼓吹している状況を紹介し、「将来は危険の状態に陥りはせぬか」と憂慮の念を示している。そのような状況を背景に開催されたカリフォルニア州の労働者大会に、日本労働者の代表として出席した友愛会の鈴木文治が「吾等労働者には国境なし」と演説したことに触れ、在米十万人の日本人労働者を犠牲に供しておいて、そして「好い顔をして日米両国労働者の握手を喜ぶ」鈴木に対して、片山は「僕は実に不愉快である」と不満をあらわにしている。<sup>(78)</sup>

日本人の労働者移民にたいする排斥運動に由来する「日米問題」への対応について、すでに多くの研究者によって指摘されているように、多数の国権論者はそれをもっぱら人種や国家間の問題とみなし、「白閥専制を打破」するという論理で軍国主義の主張を合理化し、さらに日本のアジア近隣諸国にたいする侵略を正当化する。<sup>(79)</sup> そのような国

権論者にたいして、堺らによる内なる「日本の『日米問題』」の指摘は急所をつくものといえよう。アメリカでおこなわれている外国人労働者排斥運動は現に日本国内にもおこりそうである。日本帝国主義の拡張に漁夫の利を得るのは結局、資本家階級だけで、被害を受けるのは日本を含めたアジア各国の労働者階級にほかならない。ところで、ここではせっかく「日本の『日米問題』」に触れたものの、残念なことに堺らの批判的はもっぱら資本家階級に向けられ、労働者階級内部——現実の各国の労働者と労働者の間に存在するナショナリズムの問題を直視しなかったことに注目してみたい。

資本家階級から労働者階級の治世に移れば、戦争はなくなるという堺らの非戦論への批判として、愛山はかつて次のような事実を指摘している。「今日に於て廉価なる労働の輸入を惡み、事実上の鎖国論を唱へつゝあるものは何れの国に於ても紳士の階級に非ずして平民の階級なるに非ずや。米国をして支那人を放逐し、日本の移住民を虐待しむるものは実に平民の階級に非ずや<sup>(80)</sup>」。同じような現象は日本の「日米問題」においてもおこりつつある。日本の労働者と近隣諸国の労働者の間に現存している対立は、根本的にアジア各国における排日運動の勃興につながる。これも「日本の『日米問題』」という提唱に含められるべき問題点であった。しかし、堺にはアジアにおける排日問題についてのさらなる言及は見られない。労働者階級のあいだに広く見られる外国人労働者嫌いの感情についてもきちんとした処方箋を持っていなかった。

かれによると、「人種的偏見」が「利害の衝突」によって引き起こされたものである。「社会革命」のち、利害の衝突が次第に衰えるにつれて、「人種的偏見も次第に減衰し、ついには全く消滅すべきわけである<sup>(81)</sup>」。こういう楽観的

な図式論から、堺は現実の労働者排斥問題への対処より資本家階級攻撃のほうに力を入れたと考えられる。しかし、逆にそれは現実と一般の大衆心理からの遊離であつたともいえよう。

### 第三節 堺と「大正デモクラシー」

五四運動が学生中心のデモから中国各地の労働者のストライキに高揚したところ、一九一九年六月号の『新社会』に、堺は日本政府や山東利権を要求する「志士」にアイロニーをこめて、山東問題にたいする「支那人の激昂といふ厄介な事件」<sup>(82)</sup>といった反語的な表現で五四運動に触れている。それと同時に、張継が戴天仇などの親日派の旧同盟会員と連名して書いた「日本国民に告ぐ」という論文について、「張継氏の日本に対する絶縁状」と題して取りあげた。「日本は欧州戦争以降、脅迫により廿一個条の条約を承認せしめたる以来、中国民の恨み骨髓に達せり」といった、「日本国民の耳に余ほど痛い事」が書かれた「絶縁状」を「永く日本に在り、多くの友人を日本に有する」張継をして公表せしめたのは「如何にも情けない事実である。殊にかれと古き私交を有する我々としては、真に慚悔の感に堪へない」<sup>(83)</sup>と堺は述べている。

その前号の第六巻第一号（一九一九年五月）の時評欄で、堺は朝鮮の三・一独立運動につき、「朝鮮の騷擾と総督文官制」という一文を書いている。反語的表現を多く用いているので、その真意を誤まりつたえないために、ここに全文を採録しておく。

「米国宣教師が煽動した。西比利亜の過激主義が伝播した。それで朝鮮の騷擾が起こつた。若しそれを事実とする

なら日本政府に何の責任もない。どしどし兵隊を送つて鎮圧すればよい。幸ひにまだ軍備は縮小されて居らぬ。

日本は世界に向つて人種差別撤廃の大理想を高唱した国である。それが何で自国領土内の鮮人を賤人あつかひにするものか。独立時代よりも遙かに寛大な自由な政治の下で、遙かに幸福な生活を送りながら、其の恩誼を忘却して騒擾を起すとは、鮮人も余りに物が分らなすぎる。然し世間体もある。総督武官制は文官制に改めてやる、但し武官制が悪かつたのでは決してない。その廃止が騒擾の結果だなど、考へては大間違である<sup>(84)</sup>。

その反語的表現をそのまま真意として受けとめ、堺は三一運動・五四運動を排日の民族的抵抗運動として正しく理解できなかったという批判<sup>(85)</sup>にたいする賛同はここでは留保したい。私は以上の文面からむしろ三一運動・五四運動が日本政府の帝国主義政策が招いた結果であり、日本の自業自得だという堺一流のアイロニーを読みとれると思う。しかし、堺は愛国主義や軍国主義という「世間の浮調子」に押されている日本人民の目覚めに期待を寄せている一方、その母国としての日本帝国に向けるまなざしに、辛亥革命論に見られるような傍観者的な態度と冷徹さが一貫していることも認めざるをえない。支配階級の掌中にある国家を否定する以上、「加害者意識の欠落」という指摘は本人にとって心外であろう。

ところで、日本帝国主義の侵略に大きく立ちはだかるアジア民衆の覚醒を意味する三一運動・五四運動にたいして、なぜ真正面から評価することなく、あのような反語的表現の発表にとどまったのであろうか。いわゆる「危険人物」に対する官憲の厳しい取締りもあつただろうが、実際『新社会』の「万国時事」欄などは中国や朝鮮の記事をほとんど取りあげていないし、当時の堺の関心の大きな部分はやはり日本国内の普通選挙や社会主義運動・労働運動の

推進にあったことは一つの大きな要因として考えられる。

一九一七年一月、堺は衆議院議員選挙に立候補し、その選挙公約には「最後ノ大理想——土地及び資本の公有」の「予備政策」として「普通選挙、言論集会ノ自由、結社の自由（労働者団結ノ自由）、婦人運動ノ自由」などが掲げられている。しかし、官憲の嚴重な取締りのため、積極的な選挙運動を展開できず、堺の得票数がわずかに二十五票を出なかったが、この運動を契機に、時機到来を待っていた堺が社会主義者としての実践運動に踏み出した。<sup>(86)</sup>

この時期、ロシア革命の刺激もあり、日本国内の社会主義陣営は盛り上がりを見せた。一九一七年五月七日、在京の社会主義者約三十名は「メーデー懇談会」を開催し、ロシア社会党に革命の成功を祝し、すみやかに帝国主義戦争を中止すべきことを勧告する決議を採択し、ロシアをはじめ各国の社会党に発信した。『新社会』は一九一七年七月に雑誌の経営体制の整備を行い、堺個人の経営・編集責任から、山川・荒畑・高畠・吉川守圀・山崎今朝弥・渡辺政太郎の共同経営とし、編集は荒畑・山川・高畠・堺の輪番制としたのである。その翌月の『新社会』に「同志諸君に訴ふ」という一文が掲載され、「『新社会』の守りに最善の努力を尽して、以て吾々の更に活動し得べき機会を作ると共に、苟くも機の乗ずべきあらば、飽まで社会主義的運動の為に利用せん事、吾々が今日の覚悟である」と宣言している。その後、『新社会』には堺によるレーニンの「ロシア革命」、「トロツキーの自叙伝」の翻訳、山川の「露国革命の過去と未来」などが掲載され、雑誌社の方針としてボルシェビズムの傾向を明示するなど、社会主義理論や運動論の深化と広がりが見られる。それと同時に、普選運動をめぐる運動論の分岐から、『新社会』の編集者の間にやがて大きな亀裂が生ずるが、堺は前掲の「同志諸君に訴ふ」に宣言された通りに、「社会変革の予備運動、一段階」と

しての、実際の普選運動と労働運動に積極的にコミットしていた。

米騒動前後から次第に高島が国家社会主義に傾斜し、山川と荒畑は相変わらずサンジカリズムの影響下にあったが、堺はいち早く「普選と労働組合の機運が熟してきた」という認識にたち、民衆のエネルギーとかれらの「無意識の要求」を「意識的に導いて明白な公然な運動に導く<sup>(87)</sup>」といった、今後の社会運動の道筋を予想していた。この柔軟な現実認識から、この時期の堺は『新社会』だけでなく、『中央公論』や『中外』にも普選の実現と労働組合運動の自由を訴える論陣を張り、ほかの社会主義者に見られない大正デモクラットとの思想的重奏が見られる。

しかし、興味深いことに、国内の民主化において吉野作造などの大正デモクラットと共通認識をもつ堺が「内にあつては民本主義、外にあつては国際平和主義」という大正デモクラシーのもう一つの潮流をなす「国際民主主義」に對してあまり関心を示さなかつた<sup>(88)</sup>。第一章ですこし触れたが、そもそも堺は連合国側が唱える民族自決、国際連盟、軍備縮小、仲裁裁判、デモクラシーの徹底、社会政策の徹底といった「世界改造の偉業」は、その本質は諸国各自のエゴイステイックな利権獲得のための大義名分に過ぎないとしている。一九一八年十二月、日本が英仏米伊の四国とともに中国南北両政府に、「早く南北の紛争をやめて世界改造の偉業に参加せよ」という和平統一の勧告を行なった際、堺はこの「世界改造」のスローガンを逆手に捉え、自国内に実行していない、いわゆる「世界改造の偉業」を隣国に勧める資格は日本にはないと指摘し、「敵は国外にのみあらずして各自の国内に在り。国内が大事である、内政が大切であるから、日本は「先づ其の内政における民主的な施設、社会的政策、平和的方針の確立に努むべき筈である」と主張している<sup>(89)</sup>。この堺の批判からすれば、堺はなによりも日本国内における民主主義の推進、社会主義運動

の進展を目下の最大の課題と見ていたというべきであろう。この内向の姿勢によって、かれは「日本の『日米問題』」に提示された民族主義の問題を直視しえなかったし、中国・朝鮮の民族解放運動を積極的に評価できなかったとも考えられる。

### 終りに——階級とナショナリズムのあいだ

一九二〇年六月、『新社会』の後続誌の『新社会評論』（第七巻第四号）に堺は「支那と過激派」という一文を発表している。そのなかで、堺は上海、漳州や北京でマルクス主義の宣伝が活発になっていることを取りあげて、次のように論じている。「欧州の中で経済的発達の最も遅れてゐた露西亜が真先にあの革命を起した事を思へば、支那に存外早く類似の革命が起るまいものでもない。経済的発達の結果が自然に革命になるといふ理論からすれば、露西亜の事実、及び支那に対する観測は背理の様に思はれる。然しそうではない。革命の完全な成就から云へば、矢張り経済的発達の進んだ国の方が早いに相違ないが、只だ後れた国の方が（他の事情次第に依つては）、却つて早く突变的の端緒を開くのである」<sup>(90)</sup>。

この一文を手掛りに、ロシア革命後に堺の中国を見る眼が転換したとも見られるが、「露の革命は労兵農階級の改革であり、支那の革命は商務階級の革命である」という従来の堺の考え方に根本的な変化があったとは思われない<sup>(91)</sup>。かれは中国に社会主義革命がおこってもそれは「突変」であるという認識にとどまって、中国の社会主義革命は民族解放運動と重ねて、近代国民国家・民族国家形成の過程で登場してきていることを理解していなかった。当時の中国

の革命家にとって、半植民地的状態からの民族の解放と独立が緊急の課題であり、ほかならぬ日本帝国主義こそ正面最大の敵であった。

国家や民族よりも階級という範疇を重要視して、中国革命はまだ遅れた段階にあるという公式主義的判断によって、堺は辛亥革命や三一運動・五四運動の民族主義的な側面を見落としていたのであろう。しかし、前述したように、唯物史観という「科学」にもとづいて、混沌とした中国革命情勢の分析にあたった堺の態度は、中国革命への大局的把握と長期的視野が前提になっており、近代日本の中国認識の歴史においてむしろ画期的意味をもっている。この点は大いに評価すべきだと思う。階級中心の唯物史観をもつ堺に対して、民族主義的な観点を欠落していると批判するのは、「ない物ねだり」で、当時の歴史状況にたいするあまりにも超越的で酷な評価というべきであろう。

ところで、辛亥革命や在日朝鮮人労働者の問題において、現実にも幾度もナショナリズムや民族の問題に遭遇したにもかかわらず、なぜ堺はそれを直視せずに通り抜けてきたのか。ここで問題にしたいのは、かれの「階級」という視座にとらわれた教条主義である。かつて愛山に批判されたように、かれはマルクス主義の「二元論」をすべての歴史的社会的现象の分析に応用し、帝国主義化する日本の社会主義者として、欧州社会党の「変節」問題を媒介にして、「日本の『日米問題』」といった植民地や民族の問題と真剣に取り組み、「階級」という範疇と絡み合うナショナリズムの問題と対決する思想的営為を怠ったのである。近代日本においては、天皇制がナショナリズムをほとんど一手に独占していたという客観的歴史条件もちろん無視できない。しかし、現体制・社会に対する批判思想としての「社会主義」を問題解決の方法として、いわば理念として真摯に追求した知識人のあり方としてはいささか問題があるの

ではなからうか。

国家を否定し、階級を中心とする唯物史観から、堺は横の国際闘争より縦の階級闘争を歴史発展の推進力とみなしている。かれからすれば、国際闘争と階級闘争の混乱をへて、次第に国際的階級闘争の形勢が現出し、最後には民族や国家を超える世界労働者階級の統一に到達するのは歴史の大勢であった。したがって、第一次世界大戦にあたって、かれは「愛国心」を支配階級によって政略的に動員された「迷想」と認識し、戦時中に戦争協力に転身した欧州社会党の「変節」問題を「一時の変態」として位置づけることができた。しかし、三一運動や五四運動に関する論説にあらわれたように、観念論的な色彩をもつ民族主義にあまりに冷やかな態度をとったため、かれは逆に弱小民族にとつての民族解放運動の意義を評価することができなかった。丸山真男が愛国心の「危険な側面」を払拭するため、「国民的忠誠」に拮抗しうる「階級的忠誠の発展、とくに労働者階級の国際的連帯意識の成長がもつ意義と役割は重大である」と指摘したことがある。<sup>(94)</sup> 本稿では大正社会主義に対する一考察として、雑誌『新社会』を中心に、堺における階級とナショナリズムの問題を検討してきたが、複雑なナショナリズムのダイナミックスに対応できる複眼的な「階級」の視座の確立がより重要であるといえないであらうか。

日本の「日米問題」という在日中国人朝鮮人労働者問題にたいする堺の捉え方に、「階級」という視座のもつ陥穽がいちばんよくあらわれていると思う。階級の視点を有するがゆえに、堺は「日米問題」を人種問題ではなく、「労働界の大問題」として発見し、外国人労働者排斥運動をもたらす帝国主義の矛盾を鋭く把握できたものの、各国の労働者のあいだに存在するナショナリズム（民族主義）の問題を見過ごしている。インターナショナルな労働者階級の

連携を理想とする社会主義者にとっては、労働者階級内部におけるナショナリズムの衝突あるいは相克は本来ありえないように思われる。しかし、現実の階級は純粋な現象ではなく、人種主義やナショナリズムのような近代のほかの創出物と分ちがたく接合している。労働力の商品化によって始まった労働者間の競争はまぎれもなく国家や民族間の問題に同一化され、ナショナリズムの形態を取る事となる。

たとえば、『新社会』で最初に「日本の『日米問題』」を取りあげた高畠素之はその後、アメリカなどの日本人移民排斥運動の状況が日ましに激しくなっていることに、「万国の労働者が到底団結し得ざる現実的示唆を見出し、次第にナショナルなものへと傾斜していった。現実の客観的認識から、高畠は「階級戦は飽までも相対的で外国と対立した場合には労資一切の争闘を中止し、内に磨ぎ合つた鋒先を一斉に外に向はせねばならぬ」として、軍国主義を容認する「一国社会主義」<sup>(95)</sup>「愛国社会主義」の主張を展開した。一九一九年五月に、堺は国家社会主義に傾斜した共同経営者の高畠と袂を分ち、『新社会』にあらたに「マルクス主義の旗印」をあらわしたが、日本の労働者のあいだに存在する人種主義、民族主義の問題ないし植民地の問題に対するリアルな視線が相変わらず欠落していたといえる。

もともと、階級闘争史観は、特定の国民国家の認識枠組として有効性を発揮するものであるが、国内の階級闘争を国際的なパースペクティブに敷衍して考察してみれば、被圧迫民族は国際競争下の被圧迫階級にほかならないといえる。一九二〇年七月二十三日から八月七日にかけて、モスクワで共産主義インタナショナル（コミンテルン）第二回大会が開催され、民族解放運動が反帝国統一戦線の一環として位置づけられた。この大会はレーニンの強力な指導を受け、かれが起草したコミンテルンの加入条件は帝国主義諸国の共産党にたいして民族解放闘争を支持し、自国労

働者の間に被圧迫民族への連帯感を強めることを義務づけている。

このようなレーニンの民族植民地問題に関する見解を受けとめた結果とも考えられるように、同年一月に、日本帝国主義に反対する国境を超えての連帯を意図した国際組織「コスモ倶楽部」が東京で結成されている。一九二三年中に自然消滅し、約三年しか存続しなかったが、その綱領で、「人類をして国民的憎悪、人種の偏見を去って、本然互助友愛の生活に進ましめることを目的」とした「コスモ倶楽部」は、同年一二月に成立した社会主義同盟の別動体ともいうべき、日本帝国主義のアジア侵略に反対する日本の社会主義者と民本主義者、そして朝鮮中国の留学生ナシヨナリストの交流機関であった。しかし、松尾尊允の研究に指摘されているように、官憲史料にこの倶楽部の動静を伝えるものがかなりあるのにたいして、当時の総合雑誌、社会主義運動機関誌紙、関係者の日記あるいは個々の回想録には、一、二の例外をのぞいて倶楽部の名が登場しない。堺はその「主幹者」のひとりであるが、『新社会』の後続誌で、日本社会主義同盟の機関誌になる『社会主義』にさえ、倶楽部の名は一度も見いだせないのである。<sup>(96)</sup>

日本帝国主義に反対する東アジア知識人の連帯として重要な歴史的意味をもつこの「コスモ倶楽部」が短命に終わり、関係者にさえ重要視されていなかった理由は何であろうか。官憲の圧迫、アナ・ボル対立の激化以外に、「日本社会主義者の大国意識、すなわち被圧迫民族軽視である」<sup>(97)</sup>ことを松尾尊允は一つの要因としてあげている。本論で検討した堺の内向の姿勢に見られるように、「冬の時代」をのりこえた「大正デモクラシー」の時代において、堺の関心の大半は労働者階級の国際的連帯より国内の社会主義運動・労働運動の発展にあったことも見逃せない事実である。こういう意味で、堺自身はけっしてナシヨナリズム（近代的国民国家）の枠組みから自由ではなかったといえよ

う。それでは、その後、日本の社会主義者はこの「内なるデモクラシー」を契機として、国民革命の潮流が発展していくアジア諸民族のナショナリズムを正面から受けとめる可能性はなかったのか。今後の課題にしたい。

- (1) 初期社会主義者の中国認識についての主な先行研究は次の通りである。石母田正「幸徳秋水と中国」(『続歴史と民族の発見——人間・抵抗・学風』東京大学出版会、一九五三年)、野村浩一「近代日本の中国認識——『大陸問題』のイメージと実態」(橋川文三・松本三之介『近代日本政治思想史Ⅱ』、有斐閣、一九七〇年、同『近代日本の中国認識——アジアへの航跡』所収、研文出版、一九八一年)、安藤彦太郎『日本人の中国観』(勁草書房、一九七一年)、三石善吉「山川均と藤枝丈夫」(竹内好・橋川文三編『近代日本と中国』下、朝日新聞社、一九七四年)、石坂浩一「近代日本の社会主義と朝鮮」(社会評論社、一九九三年)、上村希美雄「初期社会主義者の辛亥革命観——片山潜と堺利彦を中心に」(『海外事情研究』第二〇卷三号へ四〇、一九九三年二月)、川上哲正「社会民主党創立者たちと中国」(『初期社会主義』一三号、二〇〇〇年)、同「堺利彦と山川均がみた中国」(『初期社会主義』一四号、二〇〇一年)。

- (2) 川上、前掲「社会民主党創立者たちと中国」、一二三頁。

- (3) 堺利彦「黎明期総説」『社会科学』特輯「日本社会主義運動史」、一九二八年二月、三頁。

- (4) 山川均「ある凡人の記録」『日本人の自伝 九』平凡社、一九八二年、三九〇—四二二頁。

- (5) 日本初期社会主義の思想状況については、松沢弘陽『日本社会主義の思想』(筑摩書房、一九七三年)、荻野富士夫『初期社会主義思想論』(不二出版、一九九三年)及び南博『大正文化』(勁草書房、一九六五年)を参照。特に「初期社会主義」の研究史にたいする荻野の整理はたいへん詳細で、示唆にとむ。同氏はいままでの「初期社会主義」の定義についての各説を検討したうえで、一八九八年社会主義研究会が設立され、社会変革の思想・手段として受容される社会主義が、一九二二年の日本共産党の成立・日本農民組合結成を指標として、「総体として思想段階から運動段階へ転換する」までの時期を「初期社会主義」と新たに区分している(荻野前掲「序——研究史の概観と視角の設定」『初期社会主義思想論』、二七—二八

頁)。社会主義思想の主体的受容の視点からすれば、この区分は妥当だと思う。本稿では社会主義者が持つ「階級」という視座とナショナリズムの関係を考察の対象とし、その時代状況のほうを重視するため、便宜的に「明治期社会主義」「大正社会主義」といった表現を使う。

(6) 荒畑寒村『『近代思想』と『新社会』』『思想』第四六〇号、一九六二年十月、一三九七頁。

(7) 一九一五年九月の『新社会』創刊号の広告欄には売文社の営業内容を次のように書いてある。「文章一切代作添削 欧文和訳和文欧訳 欧文漢文立案代作 新聞雑誌原稿製作 新聞雑誌書籍編輯 校正写字及タイプ 印刷物及出版代弁 広告文案意匠図案 営業案内御報呈上」

(8) 堺利彦「日本社会主義運動小史」(改造社版『マルクス・エンゲルス全集』月報、一九二八年) 川口武彦編『堺利彦全集』(以下『堺利彦全集』とする) 第六卷所収、法律文化社、一九七〇年、三四六頁。同「日本社会主義運動における無政府主義の役割」(『労農』第二卷第七号—第三卷第一号、一九二八年七月—一九二九年一月。『堺利彦全集』第六卷所収、三〇八頁)にも同じような記述が見られる。

(9) 売文社と『へちまの花』の状況について、堺は「社会主義運動史話」(『中央公論』、一九三二年七月。『堺利彦全集』第六卷所収)の中で特に詳しく述べている。

(10) 『新社会』の発行や書誌状況などについては、主に堺前掲「日本社会主義運動小史」『社会主義運動史話』(『日本社会主義運動における無政府主義の役割』のほか、荒畑前掲『『近代思想』と『新社会』』、隅谷三喜男「小さな旗上げ」(『第一部推薦のことば』、『新社会』解題・総目次・索引、不二出版、一九八二年)、松尾尊允「復刻版『新社会』全七卷—明治社会主義から昭和マルクス主義への架橋」(『本・思想と潮流』『朝日ジャーナル』二四(四二)、一九八二年十月一五日)及び荻野富士夫「第十四章 堺利彦論——唯物論的社会主義への道」(同前掲『初期社会主義思想論』所収。この論文の原型は『日本歴史』第三六〇号—一九七八年五月)に掲載されたもので、鹿野政直・由井正臣編『近代日本の統合と抵抗』第三卷(日本評論社、一九八二年四月)にも収録されている)を参照。

(11) 堺利彦「編輯者より」『へちまの花』第十九号、一九一五年八月。

- (12) 堺利彦「小き旗上」『新社会』第二卷第一号、一九一五年九月、三頁。本論での『新社会』からの引用はすべて復刻版『新社会』（不二出版、一九八二年）による。

- (13) 荒畑、前掲「『近代思想』と『新社会』」を参照。一九一五年一二月の『新社会』（第二卷第四号）の「発行者より」に『へちまの花』以来の直接読者が五百計りある」という記述が見られる。

- (14) 荒畑、前掲「『近代思想』と『新社会』」、一二〇―一二二頁。松尾尊允によると、荒畑が指摘したこのような諸事象が顕著にあらわれるのは、『新社会』刊行後のことに属する。『へちまの花』から『新社会』に大きく進展した態度の変化にはむしろ社会主義運動にうって出る堺の決意が示されているという（松尾前掲「復刻版『新社会』全七卷―明治社会主義から昭和マルクス主義への架橋」、六二頁）。客観的要因と主観的要因はどちらが重要かという議論で、『新社会』の「小き旗上げ」の条件として両方とも不可欠だと思う。

- (15) 堺、前掲「小き旗上」、三頁。

- (16) 幸徳秋水「トルストイ翁の非戦論を評す」、『新社会』第三卷第四号、一九一六年一二月、一九頁。この一文は秋水が一九〇四年六月二七日のロンドンタイムズ紙上に発表された「璽曹悔改めよ」というトルストイの白露戦争論に対する批評。トルストイの本文（幸徳秋水・堺利彦共訳）といっしょに、『週刊平民新聞』三九号、四〇号に掲載。のちに「璽曹悔改めよ」が単行本として文明堂から出版されたとき、付録となった。『新社会』第三卷第四号では堺、荒畑、山川均、白柳秀湖らのトルストイ論とならんで、「トルストイ」特集として再録。

- (17) 堺利彦「痒いところ」『新社会』第二卷第一〇号、一九一六年五月、二六頁。

- (18) 山川均においても、同じような議論が見られる。「世界の大勢が資本制度の世界化と労働階級の世界化とに依って、現在の国家組織を超越した何等かの新組織に向って進んで居る事だけは明白な事実である」（山川「世界帝国か欧州連邦か」〈『若葉青葉（時評）』、『新社会』第二卷第一〇号、一九一六年五月、一八頁〉）。

- (19) 山路愛山「欧州戦争に関する我等の日誌（二）」（一四）『独立評論』第二卷第九号、一九一四年九月、十頁。

- (20) 山路、前掲「欧州戦争に関する我等の日誌（二）」（一四）、十二頁。

- (21) 同右。
- (22) 山路愛山「欧州戦争に関する我等の日誌（二四）」（三二六）『独立評論』第二卷第十号、一九一四年十月、十頁。
- (23) 山路愛山「自由討論の必要」、「社会主義者の看過したる事実」へ「一日一題」へ『独立評論』第四卷第一号、一九一六年四月、五十二—五十三頁。
- (24) 堺、前掲「痒いところ」、二七頁。
- (25) 山路、前掲「社会主義者の看過したる事実」へ「一日一題」へ、五十三頁。
- (26) 堺利彦「国家戦と階級戦」『新社会』第二卷第二号、一九一六年六月、二頁。
- (27) 同右、四—六頁。
- (28) 堺利彦「平民社籠城の記」（『週刊平民新聞』一九〇四年三月六日、第十七号）『堺利彦全集』第三卷、三十一頁。
- (29) 『新社会』第四卷第八号（一九一八年五月）の「カライドスコープ（時評）」に寄せた「山路愛山君の一周忌」という一文に、堺は「愛山君は僕より六つの年長で、才学から云つても、社会的地位から云つても、固より僕の先輩であつた。僕は今更、愛山君から学ぶ所の多かつた事を覚らざるを得ない」（二二頁）と書いている。愛山がなくなった直後の一九一七年四月にも『新社会』（第三卷第八号）に「人の面影—山路愛山君」という追悼文を発表している。
- (30) 山路愛山「非非戦論」『独立評論』第十二号、一九〇三年十二月、十八頁。
- (31) 十九世紀末葉から現在までの世界情勢の変化を愛山は次のようにまとめている。「総ての人種は活動して一国民となるべく予期し、その或る者は目的を達したり。第十九世紀の過半は実に此の如き国民的運動の爲めに費やされたり。国民的運動は略ぼ成功して近世国家は生れたり。世界は此処にしばらく静止の状態に止るを得べき乎。何ぞそれ然らん。進化は上帝の大法にして、活動して已まざれば人事の通則なり。……而して世運は更に国民的運動の時期より進んで帝國的運動の時期に入れり」（「余が所謂帝国主義（上）」『独立評論』第二号、一九〇三年二月、三頁）。
- (32) 山路愛山「余は何故に帝国主義信者たる乎」『独立評論』第一号、九十五頁。
- (33) 山路愛山「余が所謂帝国主義（上）」『独立評論』第二号、一九〇三年二月、二頁。

- (34) 愛山の国家観について、隅谷三喜男「明治ナショナリズムの軌跡」『日本の名著四〇 徳富蘇峰 山路愛山』(中央公論社、一九七一年)、木村時夫「山路愛山の国家社会主義」『ナショナリズム史論』(早稲田大学出版部、一九七三年)、岡利郎「明治日本の社会帝国主義——山路愛山の国家像」(日本政治学会編『年報政治学一九八二』岩波書店、一九八三年)、同「解題」「解説」(岡利郎編『民友社思想文学叢書』第三卷、一九八五年)、坂本多加雄「山路愛山の政治思想」(『学習院大学法学部研究年報二二』、一九八六年)、同『人物叢書 山路愛山』(吉川弘文館、一九八八年)を参照。
- (35) 山路愛山「国家社会主義と社会主義」『独立評論』一九〇六年四月号、四頁。
- (36) 山路愛山「国家主義梗概」『独立評論』一九〇五年十二月号、一一二頁。
- (37) 同右、二一四頁。
- (38) 堺利彦「『国家社会主義梗概』を読む」(『光』第一卷第四号、一九〇六年一月)『堺利彦全集』第三卷、一七八頁。
- (39) 山路愛山「堺枯川君に答ふ」『独立評論』一九〇六年第二号、三七—三八頁。
- (40) 山路愛山「(七) 社会主義は三元論。国家社会主義は三元論。」『国家社会主義と社会主義』『独立評論』一九〇六年四月号、九—十三頁。
- (41) 山路、前掲「余は何故に帝国主义信者たる乎」、九十六頁。
- (42) 山路、前掲「非非戦論」、二十一頁。
- (43) 堺、前掲「痒いところ」から孫引、二十六—二十七頁。
- (44) 山川均は「愛山君の世界統一論」について、「階級闘争を看過して国家間の闘争をのみ凝視した愛山君が、世界の武力的統一てふ水溜りに飛び込んだのは当然の事である」とコメントしている(「愛山君の世界統一論」へ「若葉青葉(時評)」『新社会』第二卷第一〇号、一九一六年五月、一八頁)。
- (45) 堺、前掲「痒いところ」、二七頁。
- (46) 堺利彦「次の欧州大戦」へ「蕾と芽」(時評)『新社会』第二卷第八号、一九一六年四月、一六頁。
- (47) 前掲の「『国家社会主義梗概』を読む」は平民社解散後の堺から愛山への最初の批判であった。それにたいして、愛山は

『独立評論』の明治三十九年二月号及び七月号に「堺枯川君に答ふ」という文章を書いている。大逆事件後、明治四十五年（一九二二）年一月十五日号の『国民雑誌』（第三卷第二号）に堺は愛山の批評を求める形で「唯物的歴史観」という一文を公表しており、その次号に「唯物的歴史観——堺枯川に與ふる公開状」と題する愛山の論文が見られる。

(48) 堺、前掲「国家戦と階級戦」、六頁。

(49) 第一次世界大戦における欧州社会党の転身について、出原政雄「第一次大戦期における安部磯雄の平和思想」（『志学館法学』創刊号、二〇〇〇年三月、一一七頁）を参照。

(50) 堺、前掲「国家戦と階級戦」、六頁。

(51) 一九一五年十二月の『新社会』の時評欄に、堺は仏白伊方面とロシア方面の戦場形勢から「戦争はまだく終結に近づきそうにもない」という戦争の長期化を予言し、交戦国「国内の苦痛と悲惨が増大する」にしたがって、非戦運動と平和運動はいよいよ「其の氣勢を高めて来るに相違ない。吾人が唯一の希望を繋ぐのは、実に是等の諸運動の発展である。此意味に於いて、交戦国及び中立諸国における社会党と、無政府党と、労働組合との行動が此際最も多くの注目値する」（堺「非戦運動の発展」へ「紅葉黄葉（時評）」へ『新社会』第二卷第四号、一九一五年十二月、八頁）と主張している。山川均もかなり早い時期に「万国主義の精神は漸次社会党内に復活しつつある」事実を突き止め、「万国社会主義運動の精神は、戦争熱、愛国熱の裡からも既に光輝を放つてゐる」（山川均「大戦の後」『新社会』第二卷第二号、一九一五年十月、一四頁）と述べ、インターナショナルな傾向の復活に期待と信頼をよせていた。『新社会』の「万国時事」欄などにおいて、非戦的国際社会党の動向が積極的に紹介されていた。戦争後期になると、堺には国際社会党が平和回復の中心勢力となつて、遂に大戦の終結を見るに違いないと論じる発言が多数見られる。たとえば、「人民の力と平和の光」へ「サーチャイト（時評）」へ『新社会』第二卷第一三三号、一九一六年八月。「ストックホルム大会」へ「火の見台（時評）」へ『新社会』第四卷第二号、一九一七年十月。年七月。「豆人形の踊り」へ「火の見台（時評）」へ『新社会』第四卷第二号、一九一七年十月。

(52) 堺、前掲「国家戦と階級戦」、六頁。

(53) 堺利彦「四種の半無意識活動」『新社会』第二卷第六号、一九一六年二月、五頁。

(54) 堺利彦「欧州戦争の精神的原因」『新社会』第三卷第一〇号、一九一七年六月、二一一頁。

(55) 同右、六頁。

(56) 同右、八頁。

(57) 丸山真男「愛国心」（『政治学事典』平凡社、一九五四年五月。『丸山真男集』第六卷所収、岩波書店、一九九五年）を参照。

(58) 室伏高信「現代民主主義の要求」『新小説』第二十三卷第三号、一九一八年三月、四十六頁。

(59) 室伏高信の民族主義への批判は『新社会』において、主に堺と山川によって書かれている。山川は民族の歴史にある征服の事実を見過ごした室伏の「民族的伝統主義」を帝国主義の追認と批判しつつ、民族は人類の歴史の一定の段階に至って形成されたものだから、民族についてのみ永遠性を主張するのは誤りだとした（『民族的伝統主義』へ『暴風の前（時評）』、『新社会』第四卷第三号、一九一七年十二月）。山川は『新社会』において、民族の問題に関して階級の問題を対置し、後者の優位を説く論理を提起している。社会が「掠奪階級」と「被掠奪階級」とに分裂してからは、「生存上の闘争に於ける真の対敵たるものは一つの民族と他の民族との間にあると云ふよりも、寧ろ同一民族の内部に対立して居る階級と階級との間にあり、民族間の戦争が絶えないのも支配階級同士の利害の衝突のためである。階級社会では「最早真の共同生活は民族全体に亘って存在しないで、共通の利害に立脚する一階級の内部にのみ存するものである」（『闘争と人道——トルストイの非戦論を評す』、『新社会』第三卷第四号、一九一六年十二月、二五頁）と山川は説く。

(60) 堺利彦「室伏君の眼と蛙の眼」『民族精神の不思議』へ『カライドスコープ（時評）』、『新社会』第四卷第八号、一九一八年五月、十七頁。

(61) 幸徳秋水「大久保村より」『日刊平民新聞』第六十六号、一九〇七年四月四日、第一面。

(62) たとえば、『新社会』の第三卷第五号（一九一七年一月一日）に堺は「人の面影——張継君」という一文をよせて、「東京に居た支那の革命家我々と交際したのは、老輩として章炳麟君、若手としては張継君、劉光漢君などで、それらの人々を中心に更に印度人朝鮮人安南人等を加え、東洋各国社会主義者の集会を催した時は実に愉快」だといって、ほぼ十年前の亜細

亜和親会のことを追想している。

- (63) 社会主義講習会と亜細亜和親会については、山室信一「第二部 第六章 知の回廊」(『思想課題としてのアジア』岩波書店、二〇〇一年)を参照。

- (64) 堺の中国認識について、野村前掲『近代日本の中国認識——アジアへの航跡』、上村前掲「初期社会主義者の辛亥革命観——片山潜と堺利彦を中心に」、川上前掲「堺利彦と山川均がみた中国」などを参照。

- (65) 堺利彦「支那革命の性質」(『橙黄橘绿(時評)』)『新社会』第二卷第三号、一九一五年一月、九頁。

- (66) 中華国民党の成立について、堺は「東洋天地の多事」と題する時論で、「支那は帝制問題で動揺してゐる。黄興は遠く米  
国に病み、章炳麟は幽閉の中に呻吟してゐるが、多数革命党の志士は東京に集合して謀計を回らしてゐる。南清地方には既  
に種々なる實際運動が勃発しかけてゐる」と述べている(『霜ばしら(時評)』)『新社会』第二卷第五号、一九一六年一月、  
一四頁)。

- (67) 堺利彦「支那革命の将来」(『蕾と芽(時事短評)』)『新社会』第二卷第八号、一九一六年四月、一六頁。
- (68) 同右。

- (69) 堺利彦「孫逸仙と板垣君」(『酷暑清暑(時評)』)『新社会』第二卷第二号、一九一六年七月、二四頁。

- (70) 堺利彦「支那の問題」(『火の見台(時評)』)『新社会』第三卷第一〇号、一九一七年六月、二六頁。

- (71) 堺、前掲「支那革命の将来」、一六頁。

- (72) 野村、前掲「近代日本の中国認識——『大陸問題』のイメージと実態」、一〇一頁。

- (73) 永井柳太郎「非天下泰平論」『新日本』第二卷第一号、一九一二年一月、三十一頁。

- (74) 堺利彦「慢心せる日本人」(『紅葉黄葉(時評)』)『新社会』第二卷第四号、一九一五年二月、九頁。

- (75) 堺、前掲「慢心せる日本人」、九—十頁。

- (76) 高島素之「日本の『日米問題』」(『火の見台(時評)』)『新社会』第四卷第一号、一九一七年九月、十五—十六頁。

- (77) 堺利彦「朝鮮労働者輸入問題」(『火の見台(時評)』)『新社会』第四卷第二号、一九一七年十月、二十二—二十三頁。

(78) 片山潜「米国の排日運動」『新社会』第二卷第四号、一九一五年二月、三十一—三十二頁。

(79) 「日米問題」への日本側の対応については、中村尚美「日本帝国主義と黄禍論」(『社会科学討究』第四一卷第三号、早稲田大学社会科学研究所、一九九六年三月)、間宮国夫「大正デモクラットと人種問題——浮田和民を中心に」(『人文社会科学』第三〇号、早稲田大学理工学部一般教育人文社会科学研究会、一九九〇年三月)、同「大隈重信と『移民問題』」(『社会科学討究』早稲田大学社会科学研究所、第四二卷第三号、一九九七年三月)、同「大隈重信と人種差別撤廃問題——一九一九年パリ講和会議との関連において」(早稲田大学大学史編集所『大隈重信とその時代』所収、早稲田大学出版部、一九八九年)などを参照されたい。

(80) 山路、前掲「欧州戦争に関する我等の日誌(一四)」、(三六)、十四頁。

(81) 堺利彦「そんなに心配することはない(人種的偏見の問題)」(『桜の国地震の国』所収、小学館、一九二八年)『堺利彦全集』第五卷、三一四—三一五頁。

(82) 堺利彦「無雑作な伏線と名吟の祟り」(『カライドスコープ(時評)』、『新社会』第六卷第二号、一九一九年六月、二十八頁。

(83) 堺利彦「張継氏の日本に対する絶縁状」(『カライドスコープ(時評)』、『新社会』第六卷第二号、一九一九年六月、二十七頁。

(84) 堺利彦「朝鮮の騷擾と総督文官制」(『カライドスコープ(時評)』、『新社会』第六卷第一号、一九一九年五月、三十頁。

(85) 上村は前掲「初期社会主義者の辛亥革命観——片山潜と堺利彦を中心に」において、堺のこの一文を次のようにコメントしている。「よほどこれは朝鮮総督府や政府に対するイロニイをこめた反語的表現ではないかと思つたが、決してそうではない。……張継に対する懺悔の念を述べた同じ号の時評に並んでいるのを見ると、あの詫び証文は単に張との私交上におけるそれだったのかという気がしてくる。つまり、こと辛亥革命とは限らず、堺のアジアを見る眼はそれほど曇っていたのである」(七十七頁)。『新社会』に現われた「国際民主主義」に対する皮肉った態度(注(88)を参照されたい)から考えれば、いわゆる民主主義の潮流を配慮して、日本政府は総督武官制を文官制に改めたのだというニュアンスにも取れるこの一

文は、堺の反語的表現としてとらえたほうが適當だろうと思う。

- (86) 大正デモクラシー期における堺の活動について、荻野前掲「第十四章 堺利彦論——唯物論的社會主義への道」、松尾尊  
允『大正デモクラシー』（岩波書店、一九七四年）を参照。

- (87) 堺利彦「普通選挙と労働組合」へ「カライドスコープ—百色眼鏡（時評）」『新社会』第五卷第二号、一九一八年十月、十  
頁。

- (88) 堺はかつてウイルソンなどが唱導する「国際連盟」論について、「その文面上の正義人道をそのまま信じるほど迂愚では  
ない」とコメントしている（「グレーの『国際同盟』説」へ「カライドスコープ—百色眼鏡（時評）」『新社会』第四卷第一一  
号、一九一八年八月）。ほかに、『新社会』第四卷第五号（一九一八年二月）の山川均・高島素之による時評欄にも、「今回  
の大戦は軍国的専制主義の独逸文化に対する民主主義的文明の争覇戦だ」といいながら、民主思想の防圧策をとる寺内内閣  
にエールを送る「联合国の『正義』」は「眉唾物」であると論じている（「日本の民主主義と联合国の『正義』」へ「火の見台  
（時評）」、二二—二三頁）。連合国側が唱導する「国际民主主義」について、『新社会』の態度は一貫して懐疑的である。

- (89) 堺利彦「世界改造と内政の改善」へ「カライドスコープ—百色眼鏡（時評）」『新社会』第五卷第五号、一九一九年一月、  
四頁。

- (90) 堺利彦「支那と過激派」へ「千百五番より（日記）」『新社会評論』第七卷第四号、一九二二年五月、四頁。

- (91) 一九一八年五月、堺は天津に出来た「全国商務總會連合会」をロシアの労兵農会と比較して、両者ともに「一般民意の代  
表」と見られているが、根本の相違があるとしている。すなわち、「露の革命は労兵農階級の改革であり、支那の革命は商  
務階級の革命である。但し此の商務階級は、商工業及び地主を代表する者とも見るべきだらう。日本の自由党、改進黨が、  
地主と士族と商工業者との代表者であつて、それが『一般民意を代表するもの』として、民権運動を起したのと考へ合すべ  
きである」（「支那商務階級の革命」へ「カライドスコープ（時評）」『新社会』第四卷第八号、一九一八年五月、二七頁）。

- (92) 前掲の石坂や川上の論稿には、「支那と過激派」という一文を手がかりに、堺の中国を見る眼がロシア革命後に轉換した  
としている。しかし、川上の論文にも取り上げられたその四ヶ月後の時論「太平洋會議」には、堺は依然として中国が「現

在ただひとつの退化した国家であり、先進国家の資本の自由な利用に供するべき」状態に陥っているという見方をしている（『新青年』第九卷第五号、一九二二年九月、汲古書院影印本第十卷、五八七頁）。

- (93) 日本の社会主義者にナショナリズムに関する視点が極めて希薄であったことについて、野村浩一は次のように分析している。「近代日本においては、天皇制がナショナリズムをほとんど一手に独占していたがゆえに、あらゆる反体制思想及び運動は必然的にインターナショナルな色彩を帯び」、社会主義の歴史は逆に、「その思想ないし運動をナショナリズムと如何にむすびつけてゆくかという苦悶の歴史であったともいうことができる」（野村前掲「近代日本の中国認識——『大陸問題』のイメージと実態」、九十九頁）。本論が検討した「階級」という視座における陷穽の問題はまさにこの「苦悶の歴史」の現われだといえよう。しかし、それを日本の社会主義の「宿命的弱点」として解釈するのはちよつと寛大すぎるではないかと思う。

- (94) 丸山、前掲「愛国心」、八〇頁。

- (95) 木村時夫「国家社会主義思想の史的構造」（同前掲『ナショナリズム史論』所収、一九二二—二九四頁）を参照。

- (96) 松尾尊允「コスモ倶楽部小史」『京都橘女子大学研究紀要』、第二六号、二〇〇〇年三月、二〇頁。

- (97) 同右、五〇頁。